

戦後の混乱期、昭和20年代に、誰が提唱したでもなく、婦人靴業界には、強力接着剤の出現を熱望する気運があった。先進国であるアメリカやヨーロッパでは、すでに普及していたプラットシューズや、ラッキー製法に、必要不可欠の資材だったからである。工法に、縫うか釘止めかに加え、貼り付けるが加わったことは、まさに産業革命に等しい出来事であった。

当時の業界事情に詳しかった、リーダー機械株式会社の遠藤社長の回想メモが遺されているので、転載しておきたい。

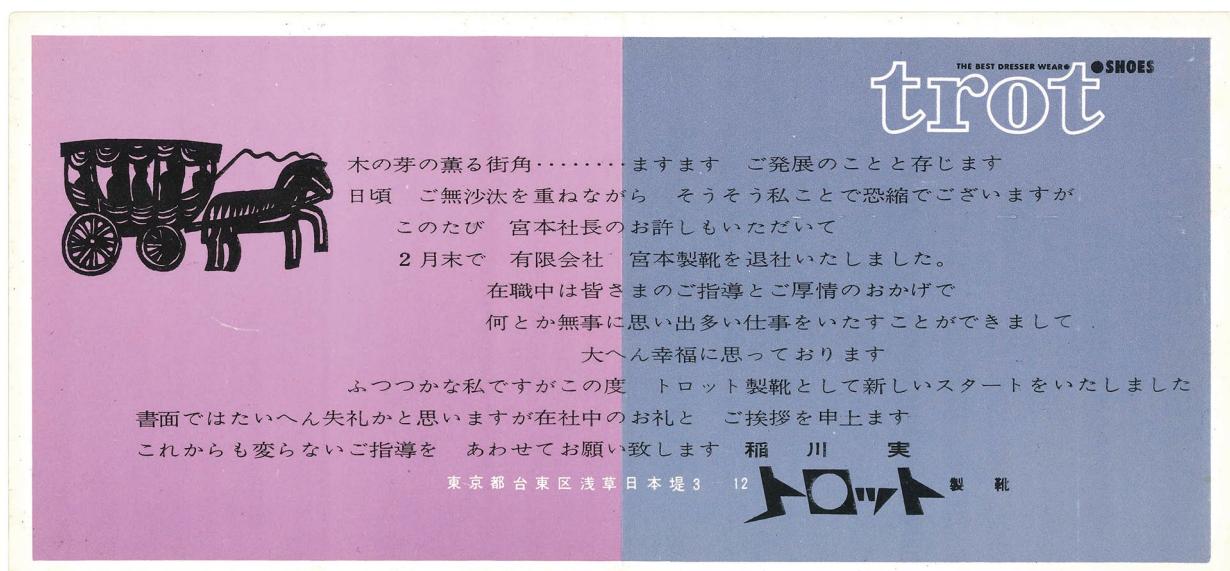
「昭和26年に『アゴー』という接着剤を輸入した。リーダー製の国産圧着機は、昭和27年より生産販売。28年には本格的に普及した。同時にプラットや、ラッキー製法が全盛となる。アメリカ製の接着剤『バンナー』を輸入。・・・浅草で最初に圧着機

を買い入れたのは、戸部さん、応手さん、ファシーさん、小菅の大沢さん、共和工業さんだった。」

似たような時期に、皮革販売の「二幸」久保田九市さんも、圧着機を輸入している。内田製靴に納入したのが、昭和24年4月25日だった。(内田製靴社史より抜粋)とあるから、これが先行した記録であろう。

圧着機が普及されるまで、靴メーカーの工場で、自転車の古チューブが、圧着機の代わりに大活躍したという話も、もはや昔話である。

私が宮本製靴を退職し、婦人靴のトロット製靴を創業したのは、昭和35年3月であった。写真は関係先にお送りしたごあいさつ状。(写真参照)



(ロゴマーク並びにデザイン 仲條正義氏)